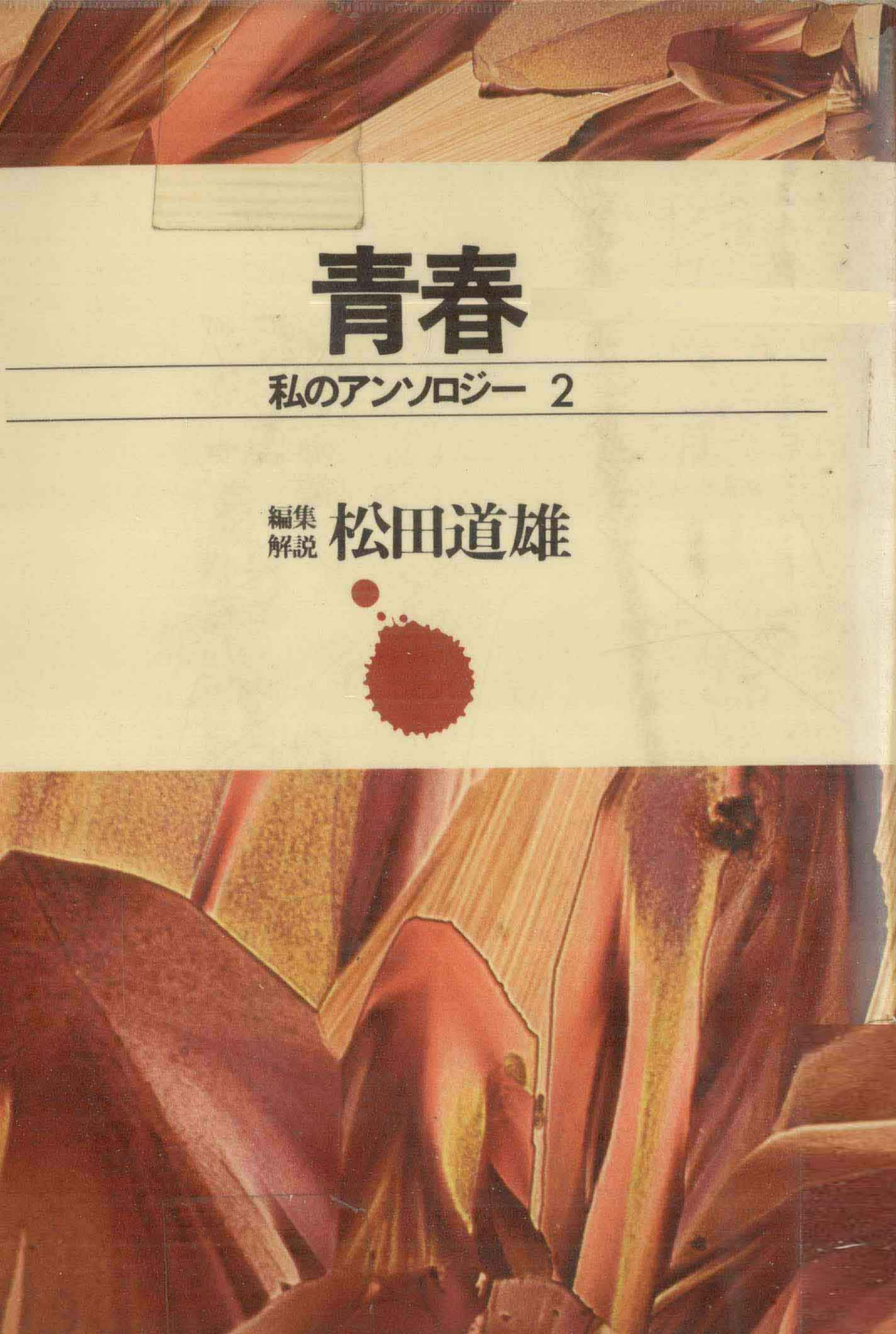
青春

私のアンソロジー 2

編集
解説 松田道雄



私のアンソロジー 2

青春

編集・解説

松田道雄

筑摩書房

私のアンソロジー　2

青春　編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）

1908年茨城県に生まれる。1932年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり，戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方，知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。

（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死すべきか」等。

1971年10月18日　初版第1刷発行

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2－8
振替東京 4123　Tel. 291-7651
郵便番号 101-91

©1971　第2回配本　装幀／中島かほる

三松堂印刷・永興舎製本

1395-03302-4604

目次

I　さまざまの青春

戦中の学生運動についてのノート　藤原春雄　3
わが海軍時代と『出撃』　斎藤龍鳳　16
毒を以て毒を制す　安岡章太郎　23
灰色の壁　埴谷雄高　29
水青き吉野川のほとりにて　井本稔　56
若き詩人の手紙（抄）　梶井基次郎　65
もう一つの導火線　金子光晴　76
青春旅日記　古今亭志ん生　87
東北伝道行商に出発　荒畑寒村　97

幼年学校時代　大杉　栄　104
放浪学生　山川　均　125

II　戦後の青春

赤線と青線の間に　五木寛之　149
戦後の学生運動・わが独白　梁谷　朗　153
江口江一君の死と山びこ学校　佐藤藤三郎　166
共産主義者同盟の成立　柴田道子　179
俺様の宝石さ（抄）　浮谷東次郎　190
異常の日常化の中で（抄）　秋田明大　214
再び、ぼくは深夜を解放する　桝井論平　219

III　青春にかんする論議

青春について　伊藤　整　225
青春論　坂口安吾　232

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

苔のある日記　鶴見俊輔　251
現代青春のなかの頽廃　五木寛之　263
青春について　倉橋由美子　274
*
対話ふうの解説　ほんものをもとめて　松田道雄　281
著者略歴　304

I　さまざまの青春

戦中の学生運動についてのノート　戦前と戦後の連続と断絶

藤原春雄

泥にまみれ　血にまみれ　進んできた
並んで歩いたのは　友人でも　道づれでもなく
ただ影だけである
その影が　沈黙をもって　心を苦しめた
―エレンブルグ―

歴史を語ることは、そのひとの現代とのかかわりあいからまぬかれることはできない。わたしが戦中の学生運動についての覚え書の一部を発表しようとおもいたったのも、この時期の日本的抵抗の在り方が、戦前と戦後をつなぎとめる架け橋として、どのような意味をもっているか。その抵抗の評価基準をさぐりだすためのささやかな資料提供の意味をこめたものである。本誌で〈わだつみの世代〉として平井啓之は、それは〈負の遺産〉だといっているが、その負とはなにか、それはなお今日性をもった問題である。本文は聞き書きと体制側の極秘資料によった。

その歴史的背景

戦前の先進的学生の思想的支柱であったマルクス主義とその運動は、熱海事件（昭7・10）で大弾圧をうけ、佐野、鍋山の転向声明（8・6）、分派の発生、リンチ事件など、内外の諸要因によって崩壊の一路をたどり、袴田里見（10・3）の検挙によってその中央部は壊滅した。また、学生運動の指導的中核の役割をになっていた共産青年同盟も連続的弾圧で、すでに昭和8年にその中央部が失なわれていた。また、滝川事件をきっかけとする学問の自由のためのインテリゲンチャと学生の新しい抵抗も暗い歴史の渦にのみこまれていった――そんな時期である。

国際的には、コミンテルン第七回大会（10・8）で反ファッショ人民統一戦線が提起され、反体制運動に転換期をむかえた。その大会でデミトロフが報告の中で〈今日では、セクト主義はしばしば、もはやレーニンの定義した《小児病》ではなくなり、一つの根深い悪となっている〉と指摘し、反体制運動の方針を大衆との新しい型の関係、新しい活動の在り方とスタイルの方向に決定的に押しすすめることをあきらかにした。

しかし、日本ではその時期すでにそのセクト主義の〈根深い悪〉によって、その政治組織が崩壊していた。さらに、人民戦線の方針にもとづいて書かれた野坂、山本による〈共産主義者への手紙〉やリフレット〈国際通信〉がアメリカから送られてきたが、日本的現実の運動主体をふまえた発想ではなかった。それは〈転向（中）〉において指摘されているような欠陥をもち、有効性を発揮しえなかった。そのうえ、それをうけてたった国内の党再建運動は、従来の紋切型の態度からぬけだすことができなかった。それらのすべての再建運動を貫く思想方法は〈32年テーゼ＋人民戦線＝党再建〉という図式をとり、方法意識のちがう二つの方針を観念的に結びつけてあやしまなかった。したがって、そこから権力への接近・移行の問題、労働者階級の民主主義的・民族的要求の課題を明確にするという現実的問題にこたえられなかった。

このことは、戦中の学生運動を規制していた主体的条件である。いえば、マルクス主義の運動とともに盛衰した学生運動は、支配階級の狂暴なイデオロギー的、政治的、警察的圧力に対抗していたと同時に、主体的には、その教条主義とセクト主義によって、がんじがらめになっていたのである。そのことは、野間宏が〈暗い絵〉の中で先進的学生たちの集団を〈現代のキリストたち〉とよびながら、〈彼らは決行するだろう。そして直ぐ逮捕されるだろう。ただ旗の位置を示すだけで。そう、それは決して成功しやしない。そして木山はそのことを知りながら俺のもとを去って行く。……〉と感慨をこめてかかないではいられなかったこととかかわりあっている。

最初からそうした苦難を背おった中に戦中の学生たちとその運動があった。まず、その状況の推移をみてみよう。

全国的学生組織解体後の試行

蘆溝橋事件が勃発したとき、すでにマルクス主義の思想とその組織は政治的地平からその姿を没していた。戦時体制への移行による国家の強権は、学生運動を推進する全国的組織体の存立をすでに許さなかった。しいてそうした要素をもったものをもとめるならば、関東学生雄弁聯盟をあげることができる。それは、昭和10年9月右翼学生によって全国学生雄弁同盟が結成されたとき、〈純真な学生団体が政治的目的を有する行動をすすめることは不賛成〉だとして、これへの参加に反対した明治、法政両大学、早稲田高等学院、青山学院の雄弁会が中心となり、昭和11年6月に組織したもので、関東学生雄弁聯盟という名称は昭和初頭の学生運動史上に積極的な役割をはたした組織で、昭和7年〈十五年戦争〉のはじめに解散されたもの。その名称で新しく出発したのも、そこには学生運動の民主主義的伝統を継承しようとする意識に支えられて発足したものといえる。

発会式に早高の高俊石は〈現代青年学徒の任務〉という演題で反ファシズム的演説をおこなった。また、昭和12年5月にひらかれた全国高校雄弁大会のときも、高津正道を招聘し、高津は現下の学生の進むべき唯一の道は反ファッショ闘争であると訴えた。学生の演説内容も、当時の政治をファシズムとして批判するもの、言論の自由を訴えるもの、二・二六事件を批判し反軍部の立場を主張するものなどがあり、臨席の官憲から再三弁士中止注意をうけた。

この組織にしても、時代の圧力によって昭和13年1月には自粛声明を出し、解散の運命を辿った。

そのほか、学生の自主的連合組織として、日中戦争下まで存続したものは、京都学生映画聯盟（昭7・1結成。加盟校＝京大、立命大、絵専、三高ほか六校）、学生新劇クラブ（昭11・2結成。加盟校＝東大、早大、慶大、立大、日大、法大、明大、専修大、明治学院ほか七校）などがある。それらの参加校には各校内に映画研究会、劇研究会などがあり、劇研の場合新劇運動の潮流とむすびついていた進歩的文化運動の系譜のなかに位置づけられるものである。

また、京都の〈学生評論〉（昭11年2月創刊、長尾孫夫、岡田格五郎、佐々木時雄、姉歯仁郎、西田勲らが編

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

集を担当、同年10月から唯研の草野昌彦が編集発行人)、〈東大春秋〉(昭9年6月創刊、磯田進、上杉正一郎、万羽正朋など参加)なども、進歩的文化雑誌として学生の間に反ファシズムの意識を定着させるうえで一定の影響力をもっていた。

東北大の〈杜の会〉など

当時の学生運動のあり方を理解するうえで、〈学生評論〉〈東大春秋〉に衝発されて〈杜の会〉を結成した東北大の学生運動をみてみよう。

杜の会は、昭和12年1月遠山景弘、河合徹、山村薫一、栗原百寿などで、遠山は京大滝川事件のときに組織された東北大の高代会議の議長、河合はそのときの一高代表、これらのメンバーは、その後社研を組織し、機関紙〈求心力〉を発行して学内自治闘争をおこなってきたが、卒業後も連絡を確立し、いわゆる〈非合法手紙リレー〉で活動をつづけていたが、〈学生評論〉〈東大春秋〉の活動に刺戟され、東北大でも進歩的文化雑誌発行の計画をたて、その運動主体として〈杜の会〉を組織した。

当時、河合は全農関東の書記となっていたが、遠山とともに大阪でひらかれた宮内勇(共産党多数派)を囲む会に参加したり、栗原百寿とともにグループを結成し、〈杜の会〉を通じて学生運動の指導を志向していた。

東北大の学生運動は昭和9年9月の検挙で壊滅状況にあったが、共青細胞残留分子の梅田治三郎などが中心になり、昭和10年10月に新明正道、八木精一教授をかつぎ合法的に〈東北帝大新聞発行準備会〉を結成し、一方、学内のマルクス主義運動の指導母胎を結成した。そして、昭11年5月に〈東北帝大研究新聞〉を発行し、学内問題—食堂改革問題、図書館改善、太田教授留任問題—などをとりあげ、その母胎である〈東北帝大新聞研究会〉を学内文化団体の戦線統一の役割をはたそうとし、その年10月〈東北帝大新聞〉の発刊に成功した。その後、唯研の戸坂潤、岡邦雄を招聘し講演会をもったり、新協劇団の公演に〈後援会学内班〉を組織化したり、〈映画鑑賞研究会〉などを結成したり文化面の活動の組織化をした。こうして〈文化団体聯合委員会〉をつくるとともに、学内闘争の展開を意識化した。12年の新学期を迎え指導部を再編成し、斎藤晴造、斎藤昌、田中正己、内藤知周、大友知などによって構成された。中日戦争勃発後、〈杜の

会〉と協力し、共青細胞建設方針を出し、困難な条件のもとで学生運動の展開をはかった。たとえば、野球大会のカモフラージュで高代会議を招集、食堂問題をとりあげたり、大森義太郎、向坂逸郎、有沢広巳など労農派系の学者を招いて講演会をひらいたりした。また新聞会、新劇研、共済部、映画鑑賞などの代表者をあつめ、非合法で〈文化団体聯合委員会〉の結成をはかったりしたが、昭和13年に検挙されて潰滅した。

これは東北大学ばかりでなく、当時の学内運動をかなり典型的にあらわしているようにおもえる。

学生の中で息づいていた文化運動

当時の学生運動を巨視的にみれば、昭和8年以後のいわゆる転向時代に対応し、中日戦争前夜の段階にあっては、地方的分散的になり、学内の活動のなかに沈潜していた。もちろん、スペイン人民戦線や国際文化擁護聯盟の成立など国際的な反ファシズム統一戦線の影響は、青年学生の心を泡だたせた。そして京都における〈学生評論〉〈世界文化〉〈土曜日〉などをめぐるインテリゲンチャ、学生や文化人の人民戦線への胎動があったとはいえ、全国的にみて学生運動は、社研、映画、演劇、文学から紙芝居、人形、俳句などの研究会活動、文化サークル活動を学内で展開し、反動の嵐を凌ぐような姿勢になっていた。それというのも、それらの運動の主体は共青の弾圧、コップの解散の中での未検挙者や起訴猶予組が多かったことと関連しているようにおもえる。

ところが、二・二六事件、それにつづく中日戦争の勃発は、学園の中に立てこもっていた先進的学生の危機感を衝発させ、ようやく、〈転向〉の傷痕のない学生層が登場してくる。その交流の中で全国的に学生層の統一運動への志向が醸酵して、新しい状況にたいする行動の模索がさかんになっていく。学園と学外との結合、卒業生や進歩的文化人との接触、学内非合法グループの結成などいくたの試行がなされた。昭和15年に弾圧をうけた〈京大俳句〉のなかに

午前二時レーニン棺より出づ

という句があるが、戦争とファシズムの嵐のなかに、マルクス主義を学んだ若い学徒の心に革命的意識が醸酵していった雰囲気をつたえているといえよう。

その間の事情を知るうえで、二〜三の大学高専での文

化活動を中心とした動きをみてみよう。

北大では、学内の共産主義的学生が検挙されたあと、未検挙者が中心になって〈桜星会〉（学内親睦団体）に拠って啓蒙活動をおこない、昭和11年秋には栗原東洋らが中心になって〈新文化運動〉とよぶマルクス主義の研究活動をはじめ、桜星会を中心にして運動を展開したが、昭和13年5月の〈北大新聞〉にルマルク〈三人の戦友〉や陳登元の〈敗走千里〉などを紹介したことがきっかけになって昭和13年5月に弾圧された。

富山高校では、卒業生の内田幸正（北大）、麻生博（東大）、吉田隆一、水谷汎（東大）などが在学生とともに、文芸誌〈白線〉の中心になり、学内団体（演劇部、脚本朗読会、史学研究会）での指導権をもち、プロレタリア芸術理論を継承して活動している。

新潟医大では、蕗谷武司などによって組織された〈劇団新潟〉に新潟医大生北村四郎、角文雄らによって学内に演劇研究会を組織、久板栄二郎の〈北東の風〉などをテキストにしてプロレタリア演劇の伝統のうえに活動を持続していたが、昭和15年5月に弾圧された。

そのほか、姫高ヒューマニスト同盟、高松高商の雑誌〈生活〉を中心とする活動など学内の文化サークル活動は、細い赤い糸のように若い学生たちをむすびつけていたが、そうした試行を統一していく運動がなかったので、体制側の各個撃破のなかで、ひとつひとつ崩壊していった。

社会科学研究会のもつ影響力

この時期の学生の活動として〈唯物論研究会〉を頂点とする社会科学研究活動はきわめて注目に価するものがあった。それというのも、唯研は戦前のマルクス主義の立場にたつ団体として、戦争下にまで弾圧をうけずに存続した唯一の組織であった。もちろん、その存在自体がアカデミックな組織としての特殊性をもっていたからであるが、そのことが逆に当時の進歩的学生を吸引する力となったともいえよう。

東大、早大、東京外語、東京商大、東京美校、慶大、東京農大、松本高校、富山高校、などには、各学校とも学内にマルクス主義の研究組織があって活動していたが、昭和13年春頃〈唯研〉の幹事であった沼田秀郷（武田武志）が中心になり各学校の進歩的学生とむすぶ〈インタ

ーカレジ〉な連絡体を結成した。東京外語の佐藤昇、早大の佐野利通、松本高校の尾崎盛光、佐藤太郎、東大の物部長興などが、その結成につとめている。物部は全国学生層の獲得の問題を提起し、当時の学生の社会的問題であった東大菊学問題（大学自治問題）、早大を中心とするいわゆる〈サボ学生狩り〉、大学、専門学校における〈アルバイト・デインスト〉などの問題をとりあげて、全国的学生運動の展開を意図した。昭和13年6月に第一回インターカレジ連絡会議をもったが、東大の物部、野島征吉、早大の佐野、外語の佐藤、末竹君雄、古屋千有、山田敦、姜甲征、東京商大の江夏美千穂、松本高の佐藤、尾崎などが参加し、活動報告・情報交換・連絡などを協議した。その後慶大、美校、東京高校、中大、法大、東京農大とも連絡がとれた。また、同年8月物部は商大の船越経三、平井潔らとともに神戸の水害救援運動をとりあげ、大衆的な反戦闘争を展開するため西下し、関大、関西学院、大阪大、大阪商大、立命大の進歩的学生と連絡をつけた。

すでに母胎としての〈唯研〉は、時代の圧力から13年1月には方針を転換し営業雑誌となる旨を声明し、1月14日に解散した。雑誌も〈学芸〉と改題し、迂回しようとこころみたが、同年10月関係者は一斉検挙された。そのため、唯研の系列下にあった学生のマルクス主義の研究組織も昭和14年1月には潰滅的な弾圧をうけ、インターカレジ連絡会議も二回の会合をもっただけで有効な闘いを組織化するまえに、弾圧のまえに消え去った。その研究対象になった主なるテキストは、マルクスの〈資本論〉〈価値、価格および利潤〉、エンゲルスの〈空想から科学へ〉〈ドイッチェ・イデオロギー〉〈反デューリング論〉〈フォイエルバッハ論〉〈自然弁証法〉、レーニンの〈帝国主義論〉〈唯物論と経験批判論〉〈何を為すべきか〉、スターリンの〈レーニン主義の基礎〉、ミーチンの〈弁証法的唯物論〉〈史的唯物論〉、ブハーリンの〈史的唯物論〉などマルクス主義の正統派理論の古典的労作であった。日本のものでは、野呂栄太郎、山田盛太郎、平野義太郎の〈日本資本主義発達史講座〉の執筆者の著書、河上肇の〈貧乏物語〉、永田広志〈唯物弁証法講話〉その他〈唯物論全書〉など、講座派系統のものがかなりよまれている。

このことは、戦争下の進歩的学生の精神構造を考察す

るうえで一つの問題を提起しているだろう。

党再建運動と学生運動

戦前の学生運動の典型的なコースをとったいわば革命運動の一翼としての学生運動を目的意識的に追求したものは、中日戦争にあっても存在していた。それは、党再建運動と不可分な関係において定立していた。

京大ケルン＝そのひとつに春日庄次郎らの日本共産主義者団と学生運動の関連がある。

団は、学生運動にたいして一般方針をもっていた。要約すれば、半封建的ファッショ的教育方針にたいして広汎な学生の不平不満を組織し、学生大衆の反ファッショ闘争を労働者農民の反ファッショ闘争と結合させ、その一翼たらしめるとともに、この闘争を通じて革命的プロレタリア分子を結集し、広汎な学生を団の指導下におくことを目標としていた。

その活動は、野間の〈暗い絵〉によって描写されているが、昭和12年暮京大生布施杜生は寺村大治郎を通じて団の竹中恒三郎とあい、京大学友会など学内組織での活動を通じて中核を学内につくることを指示された。昭和13年2～3月頃には布施、柳原正元、野口俊夫、椋梨実などで〈京大ケルン〉を組織し、京大学友会の活動を強化し、全学的な組織としての民主的中央部の組織化に成功した。民主的中央部は、内海省三（同窓会代表）、佐々木時雄（学友会代議員）、増山大助（学友会総務会）、野口俊夫（経済学部研究会）、浦田正四郎（法学部研究会）などで構成し、学内自治擁護の全学的闘いを通じて大学機構改革のプランを実行しようと意図したが、具体的活動を十分展開する以前に検挙され終息してしまった。

同志社大学でも、団の指導下にコンミュニストグループを組織し、浅井堯雄、瓜生保隆などが学内組織を再建する方針で活動し、劇研の中にフラクを確立し、大衆活動を展開しようとしたが、その途上において検挙されてしまった。また、東京へも工作をすすめたが、学生運動としては見るべき成果をあげていない。

一方、関西学院では新聞部が進歩的で、〈関学新聞〉はきわめてリベラルな編集方針をとっており、当時〈東京帝大新聞〉とともにもっとも異色ある学新としてみとめられていた。昭和12年以後、脇本照二（新聞部長）、桧山邦祐（編集長）、河田光夫がその中心になっていら

い人民戦線戦術にもとづいて、唯研メンバーをはじめ当時の進歩的文化人・教授を執筆陣にしている。昭和13年4月頃、竹中と連絡がつき、新聞のもつ合法性を最大限に利用し反戦・反ファッショの空気を醸成するよう編集方針の意識化をはかったが、昭和14年1月に弾圧によって潰滅した。

東大指導グループと学内運動

京大を中心とする学生運動が主義者団と関連して展開されていたのにたいして、東大を中心とする学生運動は、元無新編集長岡部隆司、長谷川浩、伊藤律らの党再建グループとの関連のもとに運動が展開された。その再建グループの影響下にあった元共青細胞平沢道雄は東大生木村三郎と、東大指導部を結成することを話合った。昭和12年10月頃木村は山口典彦、伊藤隆文とともに読書会組織について協議し、昭和13年4月には山口正之、内田正五、浅原正基、久野真郎などを糾合し、学内組織確立の一歩として〈日本ファシズムの特殊性〉の研究会をもち、それを主体に各種の研究会を組織した。同年8月悪名高い荒木文相の手で大学を一挙にファシズムの牙城にするため総長官選論がおこった。教授会は大学の自由のために官選反対の意向を表明したが、この教授会の意向を積極的に支持し、その運動過程で学内組織の確立をはかり、非合法指導グループを結成する方針をたてて大衆活動を展開した。この指導グループは、三二年テーゼの立場にたち、学生層を民主主義革命――封建的遺制の打倒の勢力と規定し、プロレタリア革命に好意的中立をとらせることを任務づけていた。

昭和14年2月、粛学問題がおこるにおよび経済学部の粛学促進運動を指導した。3月に指導グループ総会で、学生運動について全般的問題を討論し、実践運動を展開した。

昭和14年度から東大で最初の野外軍事教練が実施され、9月教練費の徴収が発表された。これにたいして教練費値下げ運動を展開し、9月の野外教練実施にたいしてサボタージュを指導し、反戦反軍運動を展開した。また経友会の改組運動は成功しなかったが、委員選挙では成功した。また、ゼミナール内でR・S（読書会）を強化したり、学生消費組合への指導、帝大新聞の活用など多面的活動を展開した。かくて、昭和14年7月には、市吉庸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.